

書 評

スタンレー・L・フリードランダー『労働力移動と 経済発展——ポルト・リコの事例的研究——』

Stanley L. Friedlander, *Labor Migration and Economic Growth, A Case Study of Puerto Rico*, The M.I.T. Press, Cambridge, 1965, ix+181 pp.

人口・資源比率の高い地域の人口集団が人口増加の圧力に直面したばあい、その人口集団が人口圧力に respond する人口学的行動には2つある。1つは出生力抑制の行動であり、他は人口移動—移民—である。

後者の人口学的行動によって人口増加の圧力に対して積極的なかわの努力が行なわれた典型的な事例としては2つある。1つは19世紀中葉におけるアイルランドであり、他の1つは丁度100年後の20世紀中葉におけるポルト・リコである。いずれのばあいにおいても大規模な移民が行なわれたが、移民先が両者ともにアメリカ合衆国であることは興味深い。

特に、ポルト・リコの事例は、今日の世界人口の3分の2以上を占め、共通の人口・経済的こんなんの条件をもった低開発地域における経済離陸成功の唯一の経験として重大な意義をもっている。本書は、この極めて貴重な demographic laboratory としてのポルト・リコの人口移動（移民）と経済発展との関係をあきらかにしようとした注目すべき労作である。

ポルト・リコはわずか20年間に、停滞的・農業的社会から脱却し、顕著な工業化社会への発展をなしとげた。20年間の年平均経済成長率は6.3%に達し、1人あたり国民所得は100弗から662弗と6倍以上の上昇を示した。1940年の農村人口比率は67%、1947年の農業就業人口比率は40%であったのが、1961年の農業就業人口は24%に減少した。

このような急速な経済成長に貢献した人口移動（アメリカへの移民）の役割、効果についての著者の見解を要約すると次の如くである。第1は人口増加圧力を収縮せしめるに足る規模の人口移動により、移民がなかったとしたばあいの推計人口増加年率3.5%（1950～1960）から実際の増加率0.6%に低下した。第2は移民の大部分が単純労働者であるため、熟練労働者比率や労働・土地比率ならびに資本・労働比率を高めることとなり、産業各部門における労働生産性の増大に貢献した。同時に、従来から存在していた偽装失業や完全失業を減少せしめた。第3は、出生力の低下である。1940年の死亡率低下の開始から7年間のおくれをもって出生率の低下が始った。1947年の出生率44%が今日では20に低下した。著者は出生率および総出生率について多元回帰分析（pp.63～73）を行ない、所得水準と教育が出生力低下の2大要因となっていることをあきらかにしている。

ポルト・リコの経験の transfer value については、一般に知られている如く独自のケースであるため問題がある。アメリカ合衆国との間における移民の自由、共通の通貨、アメリカ政府の巨大な援助、アメリカ資本の莫大な投資等低開発諸国にただちに適用されたい多くの政治、行政、経済上の条件が与えられている。著者はこの点を充分認識した上で、なお、経済開発過程における重要な戦略的変数としての移民の役割を主張している。“適切な条件が存在し、移民と連結して経済開発のなんらかの手段が使用されるならば、移民は、低開発、人口稠密国の経済成長に対して決定的な影響をもちうるものであることを、本研究は示している”と著者は結んでいる。

本研究に関連して問題点を指摘すると次の如くである。第1は出生率は著しく低下したとはいえなお30%の水準にあり、経済成長度に比較しなお高い点に対する社会的側面からの検討が必要ということ。第2は北海道人口の半分以下、面積では10分の1強のポルト・リコの経験は、政治行政の観点を考慮に入れると、国内における人口移動と地域開発の問題にも適用の可能性がある。という点である。（黒田 俊夫）